

書評 『はたらく女のことば』

(堀井令以知・明治書院・1992)

遠藤 織枝

たいていの読者は本の題名から、おもしろそうだ、とか自分の研究分野と関係ありそうだ、参考になるかもしれない、と思って本を手にするだろう。私も後者の立場でこの題名にひかれてこの本を買った。

しかも序章「働く女性と言葉」で著者は「……今では女は男と共に働き、男女が一体となって共生社会を実現するという時代になった。こうした男女共生社会にあって、働く女性はいかにあるべきかが問われている。言語研究に携わるわれわれにとっての関心は、職場において女性の言葉はどのようにあるべきか、また、将来の女性語はどのようになっていくかという問題である。本書ではそうした問題について考える指針を用意してみた」と述べている。

ところが実際は読む者の予想どおりには、そして著者の意図のとおりには論は進んでいかない。第1章「衣服と女性語」、第2章「職場の女性語」、第3章「昔の女性の仕事と言葉」と、ここまではどうにか、題名との関連がつかめたが、それ以後の4、5、7、8、9章はどうみても「はたらく女のことば」を述べたものとは思われなくなった。

第4章「職人ことば」の冒頭で著者も「職人は男が多いが、女職人もいた。女性は協力者であることが多かったが特に女性だけの仕事を指摘しにくいので、ここでは職人一般の言葉について記述する」と、このような章を設けた弁解をしている。そして「隠語的性格」「職人氣質を示す語句」「職人ことばの普通語化」「仕事にかける情熱」「修業の厳しさ」と確かに「はたらく女」と全く関係のないことばがいくつか取り上げられているにすぎない。

6章「現代女性の仕事と言葉」、ここなら現代の「はたらく女」のことばにふれられているだろうと期待しながら読むと、1.「マスコミ界」で、「女性アナウンサーの進出が目立ってきた」とし「アナウンサーは良い声の持ち主であらねばならない。……何よりも聞き上手の心に温かく受け止められる

ような上品な声のことである。そのためには聞き手に爽やかな印象を与える人格が求められる」という。

女性アナウンサーが進出し、そのことばについて論ずるとすれば、どのようなことばや話し方が女性アナウンサーに求められるか、現状はどうか、男性アナウンサーと比較するとどうなのか、などが述べられているだろうと想像するのが普通の読者ではないだろうか。アナウンサーの人柄を論ずるのであれば就職案内書か、放送局の新人研修パンフレットにまかせたらいい。

それなら1章、「衣服と女性語」というからこのあたりに専門的含蓄が読みとれるのかというと、ここでも大きな肩すかしをくわされる。「木綿以前の衣服の言葉」の節に出てくることばは「ヌノ、イト、モメン、アサゴロモ、アサギヌ、シロタへ、ニキタへ、ヨソイキ、フダンギ、アイダキモノ、デタチ、ハンテン、モンペ……」というわけで、どこが「女性語」なのか理解に苦しむことばの羅列である。

このように、どこまで読んでいっても「はたらく女のことば」については核心にふれてこないもどかしさが最後までつきまとう。

8章「女子学生の就職」の「新入社員の研修日誌」に著者の娘が某信託銀行に入社して研修を受けたときの日記が示されているのには驚いた。新入社員の心がまえを教育され神妙に決意を記している箇所が引用されているが、序章に著者自身が述べている「職場において女性の言葉はどのようにあるべきか」が、この新入研修生の日記に書かれているようだとするならそれはもう言語の研究書ではなく修身書であろう。さらに、10章「職場における女性のスピーチ」では、「女性の優しさを語尾にこめ、聞き上手になろう」「自己主張の激しい話し方は嫌われる」「感じの良い話し方をしよう」などと説かれる。これらは、まさに修養書であって「将来の女性語のあるべき姿の指針」となる言語研究の書とはとうてい思われぬ。

国語学専攻の学者が、その分野の研究書を多く手がけている明治書院という出版社から『はたらく女性のことば』と題する本を出すとしたら、読者はそれなりの予想と期待をもってその本を手にするだろう。それは見事に裏切られている。恣意的で一面的な、また羊頭狗肉の本の出版は、非常に残念だと言わざるをえない。